

# リルケの詩“ヘルダーリン頌”について

小松崎 直

ヘルダーリンを体験したいとは、リルケはわざわざな影響を及ぼしたが、その最も顕著な表われの一つが一九一四年に生れた『ヘルダーリン頌』(An Hölderlin) と題された詩である。成立については一九一四年十月二十六日のクリングラー夫人宛の書簡から最初の六行はこの年の九月、

残りは十月とやうにジンガーの説は信頼するに足るであろう。そゝでまことに最初の断片を、後に残りを順を追つて検討してゆくに遑つかない。

An Hölderlin

Verweilung, auch am Vertrautesten nicht,  
ist uns gegeben; aus den erfüllten

Bildern stürzt der Geist zu plötzlich zu fil-lenden; Seen sind erst im Ewigen. Hier ist Fallen 5 das Tüchtigste. Aus dem gekonnten Gefühl überfallen hinab ins geahndete, weiter.

ふみかねりへば、最も親しうみのの許せられ  
我々には走ぬれどいだら。満たわれた  
形象から精神は余りにも急激に満たわぬぐ形像へと  
急落する。潮は

永遠なるゆめのゆめとなむて潮。川の声は落ゆる

ハシマリヤ最も有為。成就された感情から  
予感やれたもののうちへ移り落ちる」といふが。

先づ上記の如きは一九一一年初頭に成立した第一  
悲歌の思想である。<sup>(2)</sup>

Denn Bleiben ist nirgends.

なまなま とんでもないせむりのだから  
更に

Ach, wen vermögen

wir denn zu brauchen? Engel nicht, Menschen  
<sup>(2)</sup> nicht, ....

ああ 私たちははたして  
誰を用ひるといふことが出来るのか 天使ではない 人間で  
はなし。

ハシマリヤ

Gekonnt hats keiner; denn das Leben währt  
weils keiner konnte. Aber der Versuche  
Unendlichkeit! Das neue Grün der Buche  
ist nicht so neu wie was uns widerfährt.

Weils keiner meistert, bleibt das leben rein.<sup>(2)</sup>

ハシマリヤの個所でハルケが “解釈された世界のなかで” (in der  
gedeuteten Welt) 私たちはもはや頼りにならぬ、と唱へて

しゆのは彼自身の経験なのである。芸術家としても 人間  
としての眞の成熟の域に達し得ないという認識は、数年来

詩人が抱き続けて来たものであつた。幾度か満たされたり  
うに思えた瞬間もあつたが、形象がまとまり、感情が成就  
されるや否や、新たな成就されれるのが詩人を切実に求  
めて現わるのであつた。

この恒常的な不安定さが、成立の早い悲歌の中では切実  
に嘆かれてゐるのである。しかし一九一〇年から一一年に  
かけて成立した “C. W. 伯の遺稿より” (Aus dem Nachlaß  
des Grafen C. W.) の題られた詩集の中の 11 頁次のよ  
うな表現がみゆれる。

やあたゆのは誰か はなし だめな人生は持続していて  
誰に出来なかつたか。それが試みの持つ無限

やー、あなたの新しい縁は

私たちにありかかるものほんに新らしくはない

の第III節である。

誰にも克服されないから生は純粹なやうだ

.....

Doch uns ist gegeben,

Auf keiner Stätte zu ruhn,

Es schwinden, es fallen

Die leidenden Menschen

Bindlings von einer

Stunde zur andern,

Wie Wasser von Klippe

Zu Klippe geworfen,

Jahrlang ins Ungewisse hinab.

」の詩は Weils keiner meistert, ..... やはじまる  
第II節のみが全く異なる形をとる草稿が存在するが、論収  
により沿っていると考えられる決定稿によつて話を進め  
る。」では試みの持つ無限さはもはや嘆かれてはいな  
い。生の自然の形式として、必然的な形式として称えられ  
てゐるのである。」の転換が」のヘルダーリン頃にはじま  
つてゐるのである。自らのうちに安んじ得る実在、湖のそ  
れにも比べるべく実在は、人間の持つ有限の存在形式にお  
いては実現するべくもなし。それ故」の世では落らる  
」の最も有為」なのである。」の世のものはすべて無  
常だが、正にそれを称えることによつて詩人の実在が可能  
なのであり、ヘルダーリンはその実証なのである。  
人間存在の不安定さを落下により象徴することには直接  
的な規範がある。つまり『ヒュペーリオーンの運命の歌』

だが私たちは知るべからず  
くとも安んじねねよつて  
滅ろゆき、落ちゆく  
苦惱する人間達が

盲目的に

時から時へと

あひで水が岩から

岩くと投げ出され

何年もあでどもなく流れ落ちてゆくように

落下する運命というモチーフがしばしばリルケに現われ

てはいる。マルテの運命が既に落下する運命、没落である<sup>(8)</sup>。

り、ヤコブセンの『マリー・グルッペ』の運命もまた落下

するものであり、ただ自らの重みに身をゆだねてしまう女

の心の落<sup>(9)</sup>下なのであった。しかしのヘルダーリン頃の落

下は、沈下ではない。自らの重みに身をゆだねること

ではないのである。急落するる（ein Stürzen）なのである。

ここに留意がなさるべきであろう。正にヒョペーリオンの運命の歌の変奏であり、リルケはこの詩に長く親しんできたのである。湖のイメージと移り落ちるという語はリルケの念頭に“水が岩から岩へと投げ出され”急落するる<sup>(10)</sup>ことがあつたことを示すのである。

この急落がヒョペーリオンとの関連を示しつゝ現われる例が更に次の短詩に見られる。

sind wir ein stürzender Stein.<sup>(11)</sup>

私たち 闇う夜のなかで  
私たちは落ちる 近くから近くくと

恋する女が露にぬれるとひむで

私たちは急落する石なのだ

この詩を支えているのもやはり“岩から岩への”急落のイメージである。ここで形象化されている無常とは愛の関係を持つそれで、更にリルケが長年親しんだ両性の対立性という考えが加味されている。恋する女は露にぬれながらも落下するが、それはマリー・グルッペの如くおだやかに沈下するのであって急落するのではないのである。そしてこの対立性がヒョペーリオン・ディオティマの例に示されていると感ずるのである。

そして十月十五日の夕方、クリングラーの許を訪れ、『ムヘル（Wilhelm Michel）のヘルダーリン（Friedrich Hölderlin München 1912）を読みでから先の六行の断片詩が“ヘルダーリン頃”と拡大される。六行の断片が一つのあらわしたイメージで貫かれていたのに対し、完成

Wir, in den ringenden Nächten,  
wir fallen von Nähe zu Nähe;  
und wo die Liebende taut,

われた詩はヘルダーリン像の一つの解釈となる一連の表象を含むのである。

最初の六行に次の五行が續くが頌歌の呼びかねと云ふ形式が用ひられる。

Dir, du Herrlicher, war, dir war, du Beschwörer, ein ganzes

Leben das dringende Bild, wenn du es aus-sprachst.

Die Zeile schloß sich wie Schicksal, ein Tod

war  
10 selbst in der Lindesten, und du betrathest ihn;

aber

der vorgehende Gott führte dich dritten hervor.

卓越せる人よ、呪術者よ、あなたにいひては生のやぐらが

それを口にしたといふ、切実な形象をなしていた。

詩行はやぐら運命のように完結し、一つの死が

最もおだやかな一行の中にあつた。そしてあなた

はその中に入った。しかし先行する神はあなたを彼方に浮び上らせた。

中心的表象は詩に於ける死といふことだ。リルケは詩と運命のイメージをヘルダーリンから継承する。ヘルダーリンでは例えば

Fürchtet den Dichter nicht, wenn er zünft, sein Buchstab tödtet . . . .

たゞ怒りやもへんか詩人を恐れではなゐない そ  
の文字は殺すが……

と見られるように語乃至は文字のうらじ姿を現わすが、リルケにおいては自分が駆使する言葉のうらじではなく、詩行のうらじ、つまり詩全体のうらじに存在するのである。この表面的には些細に思われる変更が思想全体を逆転させる。悲劇的なものに対するヘルダーリンの解釈から詩人と読むの関係に対する解釈が生れる。つまり強烈な力を備えた言葉を駆使する詩人から、信奉者にとってはいの上な

い尊厳な運命を意味する詩が生ずるのである。ヘルダーリンがギリシャ悲劇という公共的祭事に関連づけたものが、リルケにあっては全くの内的な出来事となつてゐるのである。運命、生、死が詩人とその作品との関係へと取り戻されているのである。かくしてヘルダーリンにあって死を止揚するゼウスから内的存在である詩人が生ずる。詩人は詩に呪縛され、生全体を“切実な形象”的うちに括し、詩のために自らを止揚する。詩人がこの呪縛から脱却し自らを取り戻すのは、“先行する神”が彼を彼自らのうちへと導くが故なのである。ヘルダーリンの解釈しようとした劇的な出来事は、リルケにとつては本質的に劇的な空間である詩人の内面へと移されてゐるのである。

同一のモチーフをリルケは一年後にもう一度とり上げる。つまり第四悲歌のための草稿の一つだが、その最も重要なイメージは内面の劇場のそれである。

天使はおそらく私の心の劇場に  
関心を持つだらう  
劇はやがてはじまる 致命的な力で

同じ出来事がこの根底には存在する。悲劇という目に見える出来事が孤独な実存者たる詩人の内部に生起する出来事に対する比喩となるのである。この場合にも明らかなることはリルケが継承したモチーフの解釈を変える完全な能力を有していたかということ、敬慕の呼びかけを口実に、結局はただおのれ自身について語っていたのだといふことである。このことは論文『人形』(Puppen, 1914) にじてリルケが言つていることと符合する。即ち“全く予期する」ともなく、あのようなものを書いたのは恐ろしいことではないでしょうか。私は人形のことを想い出すといふ口実のもとに最も自分独自の世界について取り扱つていたのです。<sup>(14)</sup>

次に続々詠行あまた最初の六行を接続する。

..... Engel der vielleicht  
Lust haben wird zu meinem Herz-Theater  
.....  
O du wandelnder Geist, du wandelndster!  
das spiel mir dann. Mit voller Tödlichkeit .....  
<sup>(13)</sup>  
Wie sie doch alle  
wohnen im warmen Gedicht, häuslich; und lang

bleiben im schmalen Vergleich, Teilnehmende.

Du nur

15 ziehest wie der Mond. Und unten hellt und

verdunkelt

deine nächtliche sich, die heilig erschrockene  
Landschaft,  
die du in Abschieden fühlst. Keiner  
gab sie erhabener hin, gab sie ans Ganze  
heiler zurück, unbedürftiger.

やの風景を汝以上に崇高は描かれてないな。汝以

上に健やかに次ぐるやうなべ全一に返してな  
だ。

ハリムは誰もみる世界克服の思想は変化を示さない。  
ハルダーリンの何處にその範例を求めるかは容易ではな  
い。シンガードは「ハイティアスの註解」<sup>(15)</sup>と「カーペッタ  
ナム」の指摘があるが、我々の詩の解釈はやせぬ有様では  
だ。

おお流転する精神、汝、最も流転する精神たるゆき

ハレ、われらの人々はみな

温かく諂ひのなかになんと安住したがるゝから、やがて

長い間

おお比喩の申しふくまへてるるいか、この申は闕

心のあら人々。汝のみが行く、おもむく田のあら

ハラハンドルの世界とは感じが明るく感づば睡く  
あなたの夜の風景がある。その聖なる驚おどろいたれた  
風景を

汝は別れの折々に感ずるのを。何人か

So auch

20 spieltest du heilig durch nicht mehr gerechnete  
Jahre

mit dem unendlichen Glück, als wär es nicht

innen, läge

keinem gehörend im sanften

Rasen der Erde umher, von göttlichen Kindern

verlassen.

Ach, was die Höchsten begehrten du legtest es  
wunschlos

25 Baustein auf Baustein: es stand. Doch selber  
sein Umsturz  
irrte dich nicht.

かくして

汝はや数に入らない歳月のあいだにも汝は限りない幸  
福と

神聖なたわむれを続けたのだ。まるで幸福が内部にあ  
るのではなく

誰のものでもなく 神々しい子供達に見すてられて  
大地のやわらかな芝生に転がりまわっているかのよう  
に。

ああ至高の人があがめてやまぬもの、それを汝は

無心に石材に石材を積んで建てていった。

そしてそれは出来上つていた。だが

その崩壊さえも汝をまどねすいとはなかつた。

唐突にヘルダーリンの狂気にひじての解釈が続く。この

問題についてはヘリングラーが長年研究を続け、また、

前記『ヒョルの書』にも詳細に論じられていたのであるが、

ルケはいの両者の見解、つまり「ヘルダーリンは生涯の最後の三十六年間、安んじて、ほぼ満足して、賢人として暮した。」に従つたのであった。『ヒョルの記述を引用すれば、後期の狂気の詩を新たな具体的な日付が田園での花つみのように結び合わせる。一切が静かで、理解しやすく、単純で、問題性はなかった。生活も言葉も、無限の空も健康なもの不遜さを述べるにはせますぎた。羊が細い道を通つて山の草原へ散歩に出たり、塔や家が丘によりかかるたり、通りが風景の真中を通つて走つてしたりするのを眺めるのはヘルダーリンにとって好ましいこととなつたのであつた。』<sup>(16)</sup> ヒョルは、つまり単純な存在によるおのれの感動を見出すのであつた。狂気のヘルダーリンはリルケにとっては詩人としての存在形式の究極的な帰結として映じたに違いない。彼はこれ以上先のない孤独の限界にまで達していた。自分自身のうちにとじこもり、時間と運命から切り離されて、幻滅と混濁ともまた人間世界の持つ混乱や希望とも無縁であった。

最後は一種の跋句でしめくべられる。

Was, da ein solcher, Ewiger, war, mißtraun

wir

immer dem Iridischen noch? Statt am Vorläufigen ernst die Gefühle zu lernen für welche

時間のどの愛情のためなのか  
そして感じながら夕方の冷氣を通り  
そして感じながら次の樹を眺める。

### 30 Neigung, künftig im Raum?

「J」のような永遠なる者が存在したのになぜ我々は相変らず地上のものに疑うのか 無常のものに真摯に感情を学ばぬのは未来空間のどの愛情のためなのか。

「J」の結尾部の前段階を示すのが一九一四年八月に成立した次の断片である。

So lernen wir am Hiesigen Gefühle  
für welche Neigungen im Raum?  
Und gehen fühlend durch die Abendkühe  
und schauen fühlend in den nächsten Baum.

「J」もへと我々が心地のものに感情ふ好みのまゝ

たむすれば、「J」の頌歌全体においてヘルダーリンはそのようを感じる者、つまり詩人の実存者としての可能性を保証するものとして呼びかけられているのである。「J」の結尾部にはリルケに対するヘルダーリンの意味が簡潔に包括されている。それは同時にまた最初の11つの悲歌と嘆きの詩との撤回でもあるのである。ヘルダーリンの運命が外見上の呪わしさにも拘らず意義あるものであると実証されるものだとすれば、またリルケ自身の言葉を借りれば、『自分の運命をさらけ出さずに、純粹にその中に入っていって』<sup>(18)</sup> 混濁から再び純粹に立ちのぼることがただ各人の本性によるものだとすれば、誰しも地上のものに疑いをもつてゐる権利はないところとなる。「J」では地上のものの疑わしめに対する嘆きの声は新たに獲得された「J」の世のものに「J」に対する信頼の念、称賛の声によつてかき消れてしまつてゐる。如何に不都合な条件のもとでやみくの上なく純

粹な詩人としての存在は可能であるといふのであり、狂氣のうちにも地上のものとの親密なる交合によって詩人であり続けたヘルダーリン<sup>(1)</sup>とを例証するのである。かくしてリルケは大戦末期の希望な日々にも以下のように言う<sup>(2)</sup>ことが出来るのである。“そして私はいにば、親愛なる伯爵令嬢、生とは侵すことの出来ない貴いものだと思っていふと告白いたします。おひただしい宿命とおそらしやの結合。かづかずの運命の放棄。この数年間にいや増しに増して一つの恐怖にまで抗し難く成長してしまつたもののすべて。いやふつむの生存のゆきてゐる充実と善良と好意とに關して私に疑いなど一切抱かせは致しません。”<sup>(3)</sup>

この頌歌は、ヘルダーリンから繼承したものが如何にリルケよつて改変され、またリルケに同化されていふかを明瞭に示している。モチーフ・イメージ・思想の形が変わり、解釈が改められていふことは第七行から第十一行が示す通りである。それらのものはゆきりとリルケのイメージ、リルケの思想の色を帯びはじめ、異物感を失へ、リルケの固有物となつてゆくのである。

### 〔トキメク〕

Rainer Maria Rilke: Sämtliche Werke

Frankfurt a. M. 1955 ff.

Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke Große Stuttgarter

Ausgabe

Stuttgart 1947 ff.

### 〔木版〕

H. Singer: Rilke und Hölderlin

Köln 1957

W. Günther: Weltinnenraum

Berlin 1952

E. Buddeberg: Rainer Maria Rilke

Stuttgart 1954

B. Allemann: Zeit und Figur heim späten Rilke

Pfullingen 1961

Fr. Beißner: Rikes Begegnung mit Hölderlin in  
“Dichtung und Volkstum” 37. Bd.”

Stuttgart 1936

W. Rehm: Orpheus

Düsseldorf 1950

手塚富雄：〈ヘルダーリン〉11巻

東京 一九八〇年

### 〔歴〕

(→) H. Singer: Rilke und Hölderlin Köln 1957 S. 42

- (∞) R. M. Rilke: Sämtliche Werke Bd. 1 Frankfurt  
a. M. 1955 S. 687
- 以下 S. W. と略し巻数と頁を示す
- (∞) S. W. Bd. 1 S. 685
- (4) ebd.
- (5) S. W. Bd. 2 S. 126
- (6) S. W. Bd. 2 S. 463
- (7) Fr. Hölderlin: Sämtliche Werke  
Große Stuttgarter Ausgabe  
Bd. 1 S. 265 Stuttgart 1947
- 以下 H. と略し巻数と頁を示す
- (∞) R. M. Rilke u. Lou Andreas Salome Briefwechsel  
Wiesbaden 1952 S. 247 (1911.12.28)
- (∞) 1916.9.12 an Gräfin Aline Dietrichstein  
Gesammelte Briefe Leipzig 1939 Bd. 4.  
S. 111
- (10) S. W. Bd. 2 S. 138
- (11) H. Bd. 1 S. 305
- (12) H. Singer: a. a. O. S. 45 f.
- (13) Fr. W. Wodtke: Rilke und Klopstock Kiel 1948  
たゞし H. Singer a. a. O. による
- (14) R. M. Rilke und Lou Andreas-Salome a. a. O.  
S. 341 (1914.6.20)
- (15) Singer: a. a. O. S. 47
- (16) W. Michel: Friedrich Hölderlin München 1912
- (17) S. W. Bd. 2 S. 421
- (18) 1915.3.6. an Thankmar Frhn. v. Münnhausen.  
Gesammelte Briefe Bd. 4. S. 42
- (19) 1918.10.9. an Aline Gräfin Dietrichstein  
ebd. S. 203